

増進型福祉ゼミ

第2回
2020.1.25(土)
I-siteなんば



当日プログラム

(10'~12')

- 1.開会
- 2.実践報告
- 3.質疑応答
- 4.自由交流

【参加者：25名】



地域活動づくり×増進型

～できることを紡いでカタチに～

実践報告者：堺市社会福祉協議会 下田 丈太さん

意識している二つのアプローチ

○地域住民の「困った」の解決

*ギャップアプローチ（足りない部分を埋める）
=問題のない状態をめざす

○地域住民の「やりたい」の実現

*ポジティブアプローチ（理想の方向に大きく進む）
=ありたいと思う状態をめざす

増進型を意識するキッカケ

数年前に関わった母子世帯のAさんの支援で、当初はギャップアプローチで公助/共助を駆使して足りない部分を埋めていたが、通学支援が埋まらなかった。地域に支援を調整したが、「それは個人の課題、Aさん自身でなんとかすべき」、地域住民もVoでいつ、どこで、誰が、どうやって…個人のためにそこまでできない…と閉塞感が生まれた。そのときに、形や支援を押し付けるのではなく、Aさんの現況から「みんなができること」「みんながやりたいこと」を地道に促した結果、主体的に支援の輪が広がり、Aさんもありがたいと思う状態に近づいた。そのような経験を通して双方のアプローチを駆使して実践を行っていたところ、増進型の考え方に出会う。自身の実践と非常にリンクすることが多く、現在は増進型を意識した地域づくり実践を行っている。

それぞれの欲求がエッセンスになる

地域活動づくりにおいて、話し合われるニーズが抽象的なことが多い。一方で要望（デマンド）になると、具体的すぎて、共感性が薄くなる。ニーズを満たすために欲しいもの（=ウォンツ）を、意識的に出していくことが対話のポイント。抽象的でも具体的でもないウォンツは共感性が高く、それをタネに何がしたいか…を対話を重ねて顕在化することで、みんながやりたい姿を主体的にめざす形がうまれてくる。

想いをカタチにする協働

カタチにした想いを実現する可能性を高めるのが協働。多様な主体が持つ、強み・想い・義務などを紡いでいくことで、さまざまな活動やアクションが生まれる。想いを実現することで、地域・実施者・応援者が三方良しとなることで、持続性が生まれる。そのためコーディネーター役が増進型の地域づくりを実施する際には重要となる。

実践から見えてきたこと（まとめ）

1. やりたいをベースに、課題も解決
 2. 想いをカタチにする対話と実現する協働
 3. 三方良しをコーディネートする役割
- …が地域活動づくり×増進型のポイントとなる。